

第2回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル

日時:令和5年9月2日(土)

場所:市本庁舎 18階会議室・研修室

参加者:市民委員24名、構想日本・コーディネーター、市・事務局

コーディネーター: A班 構想日本 構想日本総括ディレクター コーディネーター 伊藤 伸
B班 構想日本 特別研究員 コーディネーター 定野 司
構想日本 プロジェクトマネージャー コーディネーター 松原 康太

議事要旨:

<省略>

1. 開会

2. グループワーク

A班

<事務局より資料説明:給食提供中止事案、子ども施策一覧、相談窓口一覧>

コーディネーター:

前回多かった意見は、「小中学生にとって休日や夏休み、放課後に集まれる居場所がない」ということだったので、これをA班のメインテーマとしたいというところまで話した。メインテーマ以外にもどんどん話してほしいし、事務局より説明のあった取り組み等についても聞きたいことがあれば聞いてほしい。まずは前回参加できなかった委員の自己紹介から。

委員:

仕事の関係で一度府外に出たが戻ってきた。

今まで行政にノータッチだったので好奇心で参加を決めた。

20年以上前の話だが、当時は放課後の学童クラブにおいて学校毎で格差が大きかった。現状も知りたいている。

コーディネーター:

一度転出して戻ってきたとのことだが、決め手は？

委員:

東大阪市に数年住んでいて、家賃も安く住みやすかったこと。職場が東大阪市ということもあり、子どもにとっても住んでいた地域の環境がよいと思い戻った。

コーディネーター:

まずは市から提供のあった資料のうち、学校給食の件について、何か意見・感想があれば。

委員:

1か月は長い。親御さんは困られたのではないか。

委員:

小学生の子どもがいる同僚の話を知ると、働いている人にとっては給食が必要で、大事と感じた。

配送事業者は価格だけで決定されたのか？

事務局:

資料がなく、この場では不明。

委員:

どこまで調べて判断したのかは疑問に思った。

コーディネーター:

保護者の負担は大きかったと思う。次に同じようなことが起きないようにするのが大事。

委員:

同級生が給食の配給会社で働いていた。現場では人員不足で職場環境がよくないので辞める人も多いと聞く。行政からしたら入札時にそうした状況を察知するのは難しいとは思う。給食会社への支援も必要ではないか。

コーディネーター:

東大阪市は給食センター方式？

事務局:

給食センターのほかに共同調理場もある。

コーディネーター:

自校単独調理方式では費用がかかるので、給食センターで一度に作って配送する自治体が多い。自校方式は調理員を置かないといけないので大変ではあるが、センター方式では渋滞による配送遅延等課題もあり、逆にセンター方式を辞めた方がいいという自治体も出てきている。

事務局:

昨年度の学校給食配送問題では、24校は自校で調理を行っていたので無事だった。残りの学校は給食センター2つと共同調理場1つで調理しており影響が出た。現在、元々自校調理が基本だったのをセンター等に集約している過渡期。

コーディネーター:

単独調理校は市の調理員が調理？ 委託？

事務局:

資料がなく、この場では不明。

委員:

給食センターで働いている知り合いがいる。人数が少なく高齢化も進んでいる。若い人も来ないらしい。

コーディネーター:

事業者側のケアも課題。これを機に東大阪市の給食をいいものに変えていければプラスになる。

コーディネーター:

次に、冒頭事務局より説明した市の取組みについて、本日のメインテーマとは少し離れるが、何か意見・感想があれば。

妊婦健診については市が助成している？

事務局:

14回目までは国の助成、15～17回目までは市が追加で助成する形。

委員:

小中一貫校について、小学校と中学校を繋げる意図があまり分らなかった。

事務局:

中学校に進学すると、科目担当制、テスト方法、部活等小学校とのギャップが大きいので、移行をなめらかにすることを目指している。小学校・中学校でバラバラにではなく、教員が連携して対策するようにしている。

コーディネーター:

子どもたちにも意図が伝えられるとよい。

委員

教育の分野が気になる。自分も小中高と大阪市の学校に通っていたが、交通の便がいいから市外の学校を選ぶ人も多い。東大阪市特有のよさを出していけたら市内の学校に通わせる親も増えるのでは。

キャリア教育推進事業の体験事業はよいものと思うが、この資料で初めて知ったので、市民に知ってもらう機会を作ってはどうか。

ICTについても、職場(塾講師)で子どもに聞くと8割くらい宿題はiPadと言っていた。このまま進めていって教育分野でのICT活用が充実していけば、東大阪市を選んでくれる人が増えると思う。

コーディネーター:

体験学習とは？

事務局:

モノづくり体験として市内中小企業でワークショップをしていて、大変喜ばれていると聞いている。モノづくりに関心をもってもらい、将来市で就職してもらいたい、という意図もあり、施策の中でも重要なものという位置づけになる。

委員

過去に4つの小中学校が近かったので、お祭りみたいなことをしていた。子どもたちや地域の人がふれあうきっかけになっていたと思う。

また、中学生のときに職業体験があったが、良い取り組みだと思う。こちらが中学生を受け入れる側になった際にも初心を思い出すきっかけになった。

事務局:

お祭りについては、学校がやっているものだったら児童会生徒会が中心となって合同で行っているケースがある。地域教育として行っているものもあり、地域によって差がある。

コーディネーター:

市が実施していることは全校でやっているのか？

事務局:

職場体験はコロナの影響で実施できない場合もあったが中学2年生全体で実施している。モノづくり体験は希望のある学校の3～4年生を対象にしており、全校で実施はできていない。

コーディネーター:

子どもにとってのいい体験をどうやって作っていくか。

子どもファーストとは何かという話の中で、とにかく「子ども目線で考えよう」ということがひとつのキーワードになる。

委員:

学校で放課後に勉強できる時間があってもいいのではないかと思う。学校の方が生徒一人ひとりの学習レベルを把握していて、それに応じた学習ができるのでは。塾に通わせるとなった際、保護者目線だとちゃんと通っているか不安なときもある。学校だったら安心して通わせられる。

コーディネーター

学校で放課後に塾機能を代行するような取り組みを実施しているケースはあるか。

事務局:

放課後学習という形で週1～2、学校の先生が主体となってやっている学校はあるが、塾機能ということでは実施していない。

コーディネーター

親から離れている時間として平日に多いのが塾か部活。塾以外の選択肢として放課後学習。先生に負担がかかりすぎるので、知っているところだと地域の人が教えている所もある。また、学童クラブというのがあり、今は6年生まで対象を上げている。ただ、上の学年の子はあまり来ていないのが現状。

それでは、メインテーマとなる居場所の話に入っていきたいと思う。

大きく分けて、学校が終わったあとの放課後の居場所と、長期休み等の際の居場所の2通り。放課後については部活や塾の他何かあれば挙げてほしい。

委員より挙げられた居場所の例：

- ・商業施設(イオンモール、ゲームセンター、カラオケ)
- ・地域(公園、神社、集合住宅のピロティ、子ども会行事)
- ・友達の家
- ・習い事
- ・学校の教室
- ・その他：放課後は甥っ子等の世話をしていたのであまり記憶にない。家庭内で自分の役割だった。今思えばヤングケアラーに近い形だった。
- ・その他：Jリーグの公開練習を子どもが見に来ていた。夏場は暑いので早朝・夕方にやっていたので、放課後や塾の終わり等のタイミングに合うようだった。
→東大阪市ならラグビーやサッカー等プロスポーツの公開練習があれば。子どもがアクセスしやすければ居場所になり得る。ファンサービスもしてくれるので、子どもも嬉しいだろう。

事務局：

公開練習については把握していないが、イベントとして開催していることはあるかもしれない。

コーディネーター：

放課後の居場所について、「これだけあれば子どもたちは満足している」という考え方もあるし「まだ足りない」という考え方もある。行政主体の取組みで言えば学童もある。目線を子どもにして考えていただきたいが、学校終わったあとの居場所として事足りていると感じるか。

委員：

委員が挙げた居場所が全部使われているなら潤沢だと思う。実情として友達の家を居場所とするは難しい。夏場だと涼しい場所がどれくらいあるかは疑問。

コーディネーター：

選択肢は多いが、それで満足できるかという話。

委員：

満足しているかは実際に聞いてみないと分からない。

今の子どもは学校が終わって寝るまでにやるべきことが多く忙しいと聞く。宿題や習い事、塾等。友達も学校の友達と塾の友達では会う時間がバラバラなため友達どうして遊ぶ時間が少ない様子。

コーディネーター:

東京での話にはなるが、私の子どもはとにかく忙しくて、週3日塾で中学に上がると部活があったのでこういう居場所に行く時間がなかったが、東大阪市ではどうか？

委員:

地域というよりは家庭によるのではないか。

コーディネーター:

勉強したい人には勉強できる場、遊びたい人には遊び場が必要。子ども目線でこれだけあればそれぞれの希望は叶えられると思うか。

委員:

自分は小1からサッカーをやっていたが、小4の妹は何も習っておらず時間があった様子。自分はゲームする場所・時間がないとは思わず、この場所で何ができるのかを考えるのが楽しかったので、人によって充実しているかは異なると思う。

委員:

小学校が遠かった(1時間半ほど)ので、行って帰ってくるだけで疲れていた。放課後どこかに遊びに行っていた記憶があまりない。

経験することが大事なので、学校のプログラムの中で時間を取った方がよいのでは。何かしたいと思っても子どもが自主的に行うのは難しいので、選択肢を大人から提示して視野を広げてもらう方がよい。

委員:

中学生の頃は、部活があってバイトもできないためお金がなかった。公園に行っても、たむろしているように思われたのか白い目で見られるので行きにくくなった。

コーディネーター:

公園の環境はよくない？

委員:

綺麗な公園もあると思うが、雑草が多く踏み入れたくない。草が多いので野良猫も多く、不良少年がいたりあまり綺麗でないイメージがある。

コーディネーター:

公園を子どもたちが使わないなら意味がない。

委員:

実際にたまり場になっている公園もある。

委員：

花園中央公園はかなり広くていい場所。多少の遊具もあるし重宝する。八戸ノ里や布施からだと遠いかもかもしれないが、綺麗な公園もあるので、場所による。

コーディネーター：

近い公園が整備されているかどうかで印象が違ってくる。

【休憩前の振り返り】

- ・給食配送問題は再発しないように。配送だけでなく給食自体について考えていく必要がある。
- ・小中一貫の目的は全体にも知ってもらいたい。
- ・特徴として市特有の教育があげられるようにすればよい。
- ・塾以外の選択肢をつくるには体験。忙しい子も多いので学校のカリキュラムの中で体験ができれば。
- ・楽しみを規制するルールをどう排除するか。

コーディネーター：

主に放課後について話をしたが、長期休みや休日の居場所とは違いがあるか？ また、親が働いているときにどうするか、規則等楽しめないなら変えていこうという視点で何かあれば。

委員：

冬は日照時間が短いので外で遊ぶ子どもには影響があるが、大人の仕事時間は変わらない。そのギャップにより1人になる時間が増えてしまう。

委員：

長期休みや休日でも放課後とあまり変わらないと聞く。

自分が子どものときは、夏休みは祖母に預けられて祖母と親戚で過ごした。市民プールや大きい神社があって、自然豊かだったので虫取りなどをしていたが、それを今の子がしているかは分からない。

事務局：

現状本市に市民プールはない。アリーナ内に屋内プールがあるのみ。コロナ前は学校のプール解放をしていたが、今は休止中。

委員：

自転車で友達と大阪城公園に行って、外国人に英語で話しかけて写真を一緒に撮ってもらう遊びや、奈良公園にナビなしで道中に地元の人に道を尋ねていってみる遊び等を自分たちで考えて実行していた。東大阪の「どこにでもアクセスがいい」というのは自転車にも言えること。

コーディネーター:

子どもが楽しめないような状況はあまりないと思うか？

委員:

自分はないと思う。何事も工夫次第。

コーディネーター:

そういう考え方が広まれば居場所問題で困ることはなくなっていく。

委員:

東大阪市は何かをしたいと思えば比較的場所がある状況だと思う。

ただ、私は図書館が少し遠かったので、バスを使うか自転車で頑張って行くかの二択だった。場所はあっても気軽に行けず、少し踏み込まないといけなかったように思う。

小中学生は自転車が主な交通手段だが、場所によっては交通が危険なところもある。移動手段に大人が手を入れてはどうか。例えば主要なスポットへの巡回バス等の支援があれば。

コーディネーター:

他の地方と比べて色々場所が揃っているが、子どもにとってアクセスが不便な場合があるのであれば、そこに行くためのサポートがもっとあってもよい。

委員:

昔は1回入場したらずっと観られる映画館があったので、そこで1日中色々な映画を観ていた。

また、電車が途中下車可能な切符だったので、途中下車して色々な場所に行っていた。

コーディネーター:

昔と今を比べると遊びやすい環境が減ってきている印象。

委員:

お金はかかるが、サマースクールで子どもを2泊3日のキャンプに行かせた。皆で川遊びをしたりキャンプファイヤーをしたり、子どもにとっていい経験になったと思う。

コーディネーター:

親の立場で考えると、長期休みに何かひとつは思い出をつくってあげようという気持ちになる。

委員:

昔は学童が3年生以降預けられず、居場所は習い事だけだった。夏休み期間限定で、お金がかからずにできる体験メニューはないか。サッカーや野球教室のお試しなど。

委員:

元プロの指導で、廉価で体験教室をやっているところはあった。

委員:

そういった体験を学校の近くでやってもらえれば。

コーディネーター:

東京でも体験教室はあった。学校で情報を得たような気がする。

コーディネーター:

ずっと感じているのが、皆さんの話の中で行政があまり出てこない。「行政にそんなに世話にならなくても子どもはちゃんと生活できる」という考え方と、「行政の存在を感じていない」という考え方がある。ここからは行政の存在も加味して話してほしい。

委員:

東大阪に住んでいるのは日本人が多いが、外国人も今後増えてくる。今は日本語のニュース・広報しかないが英語での案内があれば居場所にも繋がるのではないか。行政にできることは、多言語に対応してまちを活性化させること。官民一体で行っていくべきことだが、行政メインでやってもらった方がいい。

コーディネーター:

デジタル庁で多言語翻訳機能の実証実験をしている。

窓口でアクリルパネルに翻訳後の文章が出てくるようなツールも出てきた。そういった新しい技術もひとつの手段としてあるのかもしれない。

また、観光需要が戻ってきたことでタクシーではポケットク(翻訳機)が必須品になっていると聞く。

委員:

公園の植栽整備をしてほしい。

事務局:

公園によって管理形態が異なるが、手入れをしても雑草が成長する方が早いこともある。緑をなくしてコンクリートの公園というのも味気が無いので、公園の整備については市の課題と認識している。

委員:

自分が子どもの頃は、子ども同士で何かすることが楽しかった。長期休みは冒険できる期間で普段とは違うことができた。

最近の子はゲームやサブスクがあって恵まれていると思う反面、昔は自由に花火や虫取りができた。今は公園でも花火禁止のところが増えた。日常生活のなかで子どもが自由にできる環境を作ればいいが、そこは行政に担って欲しい部分。東大阪市は物騒なわけではないし治安も悪くないので、何でも規制されてしまう状況がよくないのではないか。

コーディネーター:

自宅の庭があればできるが、マンションが増える中で花火をできる場所がなくなってきている。一般的には、行政が規制したくてしているというよりは事故や市民のクレーム等によって安全性の方を重視して規制、という傾向にある。

委員:

自由に遊ぶことは子どもにとっていい経験になる。危険なものの使い方は大人が最初に教える必要があるが、子どもの多様化には体験が必要だと思う。

委員:

自分がいたことのある他市には皆が遊べるスペースは少なかった。東大阪は恵まれている方だと思う。

コーディネーター:

規制について判断するのは行政。事故があると行政の責任になるためできるだけ未然に防ごうとして禁止事項が増えていく。行政の役割・責任でやる道以外にも色々な考え方があると思うが、少なくともこのグループの中で何がいいかというのは最後の提案書に書けたらいいと思っている。

委員:

子どもを子ども扱いしないで、例えば、大人と同じルールの施設に子どもだけが入って、社会のマナーを学ばせる取組みは効果的ではないか。子どもだから・大人だからという目線ではなく、子どもの頃から社会を理解することが重要。子どもだからという理由での規制等は、他の世代との対立に繋がっていく。大人は選択肢を増やすべきであり、子どもを制限するだけのルールを作ることはマイナスになっているのではないか。公園での花火禁止は、「子どもが騒ぐから、公園を汚くするから」という風に子どもが下に見られている部分があるように思う。

委員:

結局は大人の都合というか、危ないと思っているし何かあると困るから制限する。子どもの可能性を制限しているとも言える。

学生の頃にボランティア部活で手話を習ったり老人施設に行ったりする体験をした。どういった人が生活していて、どういった人とこれから関わっていくかを学ばないといけない。話せないで困る事例は日常生活や病院等でも起きている。手話のできる人が簡単な手話を教える、外国人が外国語を教える、逆に日本語を教わる、そういう体験をすることで知識が身につく。

また、職業体験施設の無料版や安価版があれば、子どもの可能性を広げることができるのでは。

【後半のまとめ】

- ・休みの日の過ごし方を個別見てみると行政にしてほしいことというのはあまり出てこなかった。
- ・行政の役割としては、子ども同士で遊ぶことが出来る環境の確保が重要。
- ・公園などの規制は、事故や苦情がある中で管理責任のある行政が結果として安全な管理をするために生まれてくる。
- ・子どもを子ども扱いせず、大人の社会を経験してもらうのも必要。

コーディネーター:

次回にあたり、子ども視点で考えたときに何が危ないかという事例を考えてきてほしい。そういった事例の中で、大人として何ができるかというところを考えていきたい。
また、「子どもファースト」というテーマについて、A班の考える「子どもファースト」についても4回目までには定義できるようにしたい。

B班

コーディネーター:

狭く深くテーマを掘り下げていく回としたい。

<事務局より資料説明:相談窓口一覧>

コーディネーター:

前回言及があったスクールカウンセラーの件は市から指導して解決した。困りごとがあればストレートに言ってもらったら解決に繋がる。

前回の議論やA班のテーマも踏まえ、多様な家庭・子どもへの対応+親のサポートというテーマにしていければ。

コーディネーター:

A班と違うテーマの方が、市全体に還元できる満足度も上がるかと思う。

子どもの環境はシングルマザー・ファザーや国籍等さまざまだし、親や保護者だけではなく家族や周りの人も子どもを支える立場にある。

また、子どもと言っても小学生を想像する人もいれば赤ちゃんを想像する人もいる。その辺の具体的なイメージを聞いていきたい。家庭がない人は、こういうまちだったら長く住めるなあという視点でも。

委員：

前回の流れで居場所の話になるかと思って、自分の子どもに話を聞いてみた。東大阪市はトラックが多くコンビニの駐車場が広いので、コンビニに隣接するようなスペースを作ってはどうか？と小4の子どもから提案があった。中2の子どもは、ゲームをするのでWi-Fiが欲しいと。

子育て環境も、自分の住んできた他自治体に比べ東大阪市は充実している。学校からプリントがたくさん来るし発信も充実している。ただ、市民の側からも積極的に情報を取りに行く姿勢が必要かも。

また、中学校は先生の病休が多い。子どもが成長してきて親が学校にお任せしがちになると、子どもにはまだまだ指導の必要があるのに先生の負担が大きくなる。中学生の親のサポートや保護者の意識を高める取組みが必要と思う。中学生は子どもたちが荒れてくる年代。

コーディネーター：

親が困っているときに相談相手がいると余裕が持てる。親のサロンは東大阪にはない？ 具体的にどんなことをすればサポートになるのか考えていかなければ。

委員：

教師の働き方には顧問の問題がある。部活によってはとても忙しく、教材研究もしないといけないなか生徒に寄り添う時間がなくなるし残業も多い。外部に部活の仕事を渡せれば、専門家に教えてもらう方が生徒にとってもよい。リタイア人材も活用してはどうか。

コーディネーター：

部活指導員、地域クラブ活動も増えてきたがまだまだ追い付いていない。部活命！の先生もいて、先生の中でも感覚が違う。

委員：

学生時代、部活動が情緒の発達も繋がるという考えで部活に熱心な先生がいた。生徒と深く向き合うためのとっかかりに部活を活用している先生もいるのでは。

コーディネーター：

先生もひとくりにしてはいけない。嫌な部活を押し付けられたら嫌だろうけど、好きな部活であれば熱心に活動できるかもしれない。

コーディネーター：

過去に部活の調査をしたことがある。公立の先生は時間外の活動にあまりお金が出ないし志望者は減っている。数校での合同部活なども出てきているし、学校対抗の意識が変わっていけば部活の在り方も変わるかもしれない。

委員：

現在息子が術後で左手にギブスをはめているが、それでは預かれないと保育園に言われてしまった。今は妻が仕事を休んで見ている。保育士が足りず対応できないと言われたことから、保育士の人数は充足

しているのか？と疑問を持った。シッターを頼むことも考えてはいるが、そういうイレギュラーへのサポートが保育園であってもいいのかなと思う。

また、妻に前回会議の話をしたところ、産院でなく病院で出産したいと思ったときに、中々見つからなかったという話をしていた。出産環境も充実していないと感じる。

コーディネーター：

保育士の人数は、子どもの人数に対して配置されているはず。人数は足りているが手が足りないという意味だと思われる。

委員：

1人に手がかけると他の子を満足に見られないということだと思う。

委員：

子ども・子育てについて、国が予算を削っているのが根本的な問題。末端の市民が何を言っても変わらない。

自分たちの世代だと、学校の先生の裁量が大きかった。体罰を受けても、親の感覚としては「叩かれたあんたが悪いやろ」という時代だった。今は先生に任せっきりのうえに何かあったら問題になる時代。親の感覚をただす必要もある。国が変わらないといけない。

コーディネーター：

確かに親の意識は子どもにとって大きい要素。学校で赤信号は渡らないと教えられても、親が渡っていたら渡ってしまう。昔は「近所の怖いおじさん」もいた。

委員：

今は核家族化もあり、近所付き合いも減った。どう社会を戻していくのか。

コーディネーター：

おかしいと思う部分には声を上げていかないといけない。

委員：

国が変わらないと無駄。親に課税するシステムの中で誰が子どもを産みたいと思うのか。

コーディネーター：

市民から声を上げていくことがバタフライエフェクトになることもある。

コーディネーター：

多様性研究の分野で、ニューロダイバーシティという、発達障害等もひとつの個性としてインクルージョンする考え方がある。日本の親は障害者と触れ合う機会が圧倒的に少ないため、障害者をどう扱っているのか分からない。触れ合う機会を作るというのもよいか。

委員：

子どもの定義、年齢は？

コーディネーター:

0～18歳が法律上の「子ども」。実態としては自立していない20歳もいるだろうが。引きこもり等、自立できない大人はどうしていくのかという課題もある。

委員:

市内の中学校で教育実習をしている。初めて先生の立場になってみて仕事の幅広さを感じた。教員不足で忙しいなかでも先生はできることをかなりやってくれている。

支援学級の子と触れ合う機会があり、“普通”に見える子も苦手な分野があることが分かった。子どもどうしでの助け合いも目にすることがあり、その意識は大事だと思った。

望んでいない部活を担当させられるのは自分も疑問に思う。先生の業務適正も考慮する必要がある。教師になりたいとは思いますが、不安な部分もある。

委員:

子どもを通わせていた保育園でトラブルがあり、市に相談して園と話し合いもできたが結局子どもは保育園に復帰できず、そのため自分も仕事に行けなくなり追い詰められた。その際に子ども家庭センターに子どもの話も自分の話も聞いてもらって、市の対応に感謝している。

コーディネーター:

相談のきっかけは？

委員:

最初は保育士に腹が立っていて、市に告発してやろうと連絡したら、相談先として子ども家庭センター（事務局注：子ども見守り相談センターの可能性もあるか？）を紹介してくれた。保育所は紹介してくれなかった。

コーディネーター:

センターのどこがよかった？

委員:

話を否定せず聴いてくれた。子どもの様子も見て、発達障害の検査も提案してくれた。いつでも来ていいよと声をかけてくれたのも安心した。

また、担任の先生と違う先生が臨時で入ってくれるしくみがあればいいと思う。ケアが必要な子の対応や、特定の先生が苦手な子のフォローなどができれば。友人でも、フルタイムは無理だが保育士資格を活用したいという人いる。市が窓口になってそういう人を活用するようなしくみを作ってはどうか。

コーディネーター:

「つながる」というのはいいキーワード。保育園と子ども家庭センターは同じ目的を持っているはずなのに連携できていないことが問題。繋がっていく必要がある。

委員：

デジタルの活用が更に進めばよいと思う。クラブ活動として、e スポーツクラブもあるらしい。プロの指導を受けられる場等、デジタル格差へのアプローチが必要。子どもも大人も一緒に成長した方がいい。居場所としても、皆が集まる場所があればいい。デジタル活用して交流する場所あれば。東大阪市にはないので。大人はデジタルに疎いので子どものコミュニティに入れず理解のギャップが生まれていく。

コーディネーター：

近年は e スポーツ塾もある。大人は「ゲームは教育じゃない」という感覚があるが、ゲームを通してコミュニケーションを取るということは重要視されてきている。

委員：

子どもはもう成人しているため中々子ども・子育てのことが分からなくなってしまうが、調べたり妻と話したりしてきた。子育て支援の手厚い市も見つけたが、物品購入の支援が多く、結局お金がいるのだなあと感じた。

妻は元幼稚園教諭でたまに託児所に行っているが頻度は高くない。働く意欲があっても場所がない。母親の支援ができるスペースを文化センター等でやっていたのを見たことがある。子どもを隣で預かりつつ、リフレッシュや文化サロン等に行けるようなスペース。

一方、自分の親はもう 80 代。親族の介護や手続き関係を手伝っているなかで思ったのが、介護の利用者にはケアマネが必ずいるが、小さい子どもにもそういう役割の人が 1 人 1 人についてもいいのではないかということ。困りごとが起きたときにアドバイスするような人がいたらよい。

また、資格がない人でも学校や保育の現場に参加・支援できるようなしくみが市主導であれば。副担任制も含め、外から見れる人・内から見れる人等色々な立場の人が子どもに関わっていけたらよい。

コーディネーター：

子どもケアマネは面白いアイデア。子育て～学齢期～成人とコーディネートできる役割の人がいたらよい。事例を調べて紹介する。また、教科を教えるには教員免許が必要だが、その他のこと(部活指導等)は免許がなくてもできる。そういう部分で人材を活用できればということか？

委員：

そう。普通の人には、「自分は教員免許もないし学校現場に入れないだろう」と思っている。スキルを持っているのに。

コーディネーター：

人材マッチングのしくみづくりが必要。

委員：

親も先生も皆疲れていると思う。自分にも他人にも厳しくなりすぎて行き詰っていると感じる。親になってみて、他人からの目が厳しいと思う。一方で、自分の厳しさを他人に求めてしまう思いも強い。例え

ば、自分の親は難病指定を持っているが障害者駐車場使いたくないと言う。なぜなら、見た目で見えないから何かを言われたらどうしよう・でも殊更にヘルプマークも付けたくはない…というような思いがあるため。自分への不必要な厳しさはどうやったら解決できるのか。自分の中にストレスを溜め込まないようにするにはどうしたらよいのか。

委員：

障害者スポーツに興味があり、車いすソフト、車いすバスケット、車いすアメフトをやっている。堺市のスペースでは身体障害者だけでなく精神障害者も利用している。そこで、「先生は障害者の扱いが分からず車いすスポーツを教えてあげられない、『分からない』で済まされている」という話を聞いた。自分たちで楽しみながら、どうしていったらいいのか考えている。ただ、そういう場所を知ってもらう機会があまりないように感じる。東大阪市のウィルチェアスポーツコートも国内で有数の場所なのに知られていない。競技参加するにもかなり調べないとたどり着けない＝興味のある人しか参加できない。参加しやすい場を作れたら。学校の体育館でもできれば。

コーディネーター：

体育の授業でも障害者スポーツ取り扱うことあるが、実際にやってみたりプレイヤーの話を聞く機会はあまりない。取り組んでいく必要がある。

委員：

福祉の仕事をしているなかでヤングケアラー問題に触れた際に、親の困りごとを聞く窓口はあるが、子どもが相談する窓口を子ども自身は中々知らないという課題を感じた。知っていても相談するのにかなり勇気がいる。LINE を活用し、固い雰囲気ではなく簡単で分かりやすく気軽に使える子ども向けの市公式アカウントや相談窓口を作ってはどうか。そこで一言吐き出せるだけでも変わることはあると思う。お金がかかることなので、財源は検討の余地があるが。ふるさと納税活用するなど？

委員：

子どもは学校から相談窓口のプリントをよくもらってくるが、子ども自身は見えていない。iPad にそういうアプリを入れてみては。

委員：

学校で演習させてあげてほしい。そうすれば、実際に使うまでのハードルが下がる。

コーディネーター：

いざとなったら使うよう紹介するだけでなく一度実践しておくのはよい。

委員：

子どもは他の家のことが分からず、自分の家庭が当たり前だと思っている。デジタルの活用などで問題の早期発見に繋がれば。

コーディネーター:

家庭訪問が少なくなり以前だと見つけられた問題が見つけられなくなっている。

委員:

幼稚園児～小学生の通うプログラミングや理科実験の塾講師をしている。授業が終わっても残ってフリースペースで宿題をする子や遊んでいる子もあり、中には親が仕事で帰っても1人だし…という子もいる。もう少し位置づけのある形でこうしたフリースペースが増えればよいと感じる。また、授業後に塾に関するだけでなく子育て全般の相談していく親もいる。親は喋りたがっている。公式の子育て支援センターや相談窓口はアクセスしづらいところもあるので、フリースペースが色んなところにあればよいと思う。学習塾では難しいかもしれないが、プログラミング教室等であれば空気感も厳しくないで、民間塾と市が連携して、子どもを迎えに来たときにちょっと喋れる場を作ってはどうか。学校と連携し出張実験を行うこともあるのだが、そういう「放課後にいられる場所」を作ってもよいのでは。自分の子どものイメージは、仕事のこともあり小学生ぐらい。

コーディネーター:

学校と塾の連携はいいと思う。なぜなら、子どもが触れる大人は親と先生に限られてしまいがち。塾の先生等、「第三者」に触れることは子どもにとってもよい。「愚痴が言える塾」みたいなフランクな場も面白い。市が入ると固くなったり、やってはいけない部分が出てきがちなので、言えない・聞けないことが出てくるくらいなら市と連携しなくてもよいかも。学校・家の愚痴を言える第三の場が子どもには必要。

コーディネーター:

まとめ:親の相談先がない・分かりにくい。子ども自身が声を上げる場所がない→「つながり」「子ども自身からの発信」というところがB班のキーワードになるのでは。

委員:

廃校になった小中学校はある？

事務局:

単純な廃校ではないが、別の学校に統合されて場所として空いている学校はある。

委員

そこで今日のアイデアを実践すれば課題解決に近づく。

【休憩後、後半】

委員：

東大阪市はいいところ。マナーがよくないところもあるが、落としたものを拾ってくれたり、泣いている子に声をかけてくれたり、東京にはない「つながり」を実感する。こうしたよさを発信していく必要がある。相談窓口もよく整備されている。東京では現金給付の支援策が多く、お金で解決という発想を感じる。東大阪では、モノづくりや職業体験、田植えなどの体験メニューが充実している。「相談窓口に甘えていいんだ」という事例を発信し認知度上げること、ツールを実際に使わせることが必要。

委員：

iPad を授業に使うことももちろん大事だが、相談に活用していけたらよいと思う。固定された人間(担任・親等)以外へ広がっていくような関わりが必要。また、そういう相談窓口や相談方法があることを周知していく必要がある。

委員：

外とのつながりは必要だと思うし、イベントや交流の場があるのであれば知りたい。自分にも情報が届いていないという実感があり、周知の必要性を感じる。

委員：

自分が学生当時、先生が怖かったことによる抑止力があつた。

コーディネーター：

今は子どもの権利にフォーカスする時代。相対的に先生の「尊厳」のような部分が落ちているのかも。

委員：

大人が子どもに向き合わなくなっていることが問題。

委員：

子どもの権利が尊重されることはいいことだと思う。今母校に教育実習に行っているが、当時とは制服も校則も変わっており、必要のない校則の変更は、生徒会が呼びかけて実施できたと聞いた。子ども発信で物事を変えていけるという体制は今後も守ってほしい。また、自分も困ったときに誰に相談していいか分からなかった経験があり、当時は先生・親をひとまとめにして「大人」に何を言っても…という気持ちがあつた。子どもが自分の持っているツールで相談できるのはとてもよいことと思う。

委員：

東大阪市、子育てのまちのイメージがない。実態としてはいいまちだし子育て支援も充実しているが、「トラックが多い」「汚い」等と言われがち。東大阪で育つた子はまちに愛着を持っており転出しない人が多い。いいまちであることを発信してほしい。

委員：

ICT、まだ先生が分かっていない部分が多い。そこに頼りたくないというプライドもあると思うが、子どもにとってはメリットがあるものなので取組みを進めてほしい。また、デジタル技術の活用は子どもから大人に還元があることでもある。

委員：

東大阪のイメージは今後変えていってほしい。いいまちなので。

委員：

「相談窓口」と言われるとハードルが高く、問題が深まってからしか来てもらえない。看板を外し、その手前で来てもらえるような気軽な場所があれば。例えばプログラミング教室のようにワークがあってその中でぼろっと本音を聞けるような場所があれば。それをしっかり拾って支援に繋げていく。

委員：

子どもがいじめの被害等を自分で言葉にするのは難しい。アプリなど気軽な形で相談できるのはよい。周知の課題も、iPadに入れることで嫌でも目に入り触れることになって一定の解決が見えるのでは。

コーディネーター：

相談のハードルが高いというのは、ツールの問題もあるし、「誰に相談するのか」という問題でもある。公的な人間がいる相談窓口も必要だが、自分より少し年上の人や生徒会のような身近な人に相談できるしくみもよいかもかもしれない。

委員：

情報の周知に課題がある。いい取組みをしていることを知ってもらわないといけない。

委員

色んな課題に市も一定取り組んでいると思うが、周知は足りていない。インパクトのある分かりやすい施策を打ち出してはどうか。子ども専用アプリや廃校まるまる活用など。

コーディネーター：

次回、インパクトのある施策を考えていくのはどうか。また、東大阪市はいいところだと皆が思っているのに伝わっていないことが分かった。発信していないのはもったいない。イメージが変わることが、シビックプライドにも繋がる。

3. 本日の会議のまとめ

A班

- ・給食の経緯確認。この事例をプラスに転換していくため、給食の充実を図る必要がある。
- ・子ども施策一覧確認。交通の便のよさを教育にも活かしていければ。体験学習、ICTの活用。
- ・放課後及び長期休暇・休日の過ごし方を議論。意外に場所自体はあるが、充足しているのかは考える必要あり。
- ・行政の話があまり出なかった。行政の立場について投げかけを行ったところ、「自由に使える場所が減ってきている」という意見が出た。子どもの視点で考えると、大人が子どもの自由を制限しているのではないか。
- ・大人は必要以上に子どもを子ども扱いしているのではないか。子どもの話をきちんと聞くこと、社会を学ぶ体験、機会が必要。
- ・次回に向けて：子ども目線で危険なポイントを挙げ、解消するために大人(行政、民間、地域等々)は何をしたらよいのか考えていく。

B班

- ・①自分で声を上げられない子どもとのつながり：アプリなど相談しやすいツールの整備、相談先は誰がよいのか、次回検討
- ・②資格がなくても子育てに参画できるしくみを通じたつながり：保育や学校現場への人材マッチング
- ・③障害者と健常者(子ども・大人)のつながり：ふれあう機会がなく接し方が分からないという問題。
- ・④行政同士のつながり：関係部署どうしの連携を強化
- ・⑤民間/スペース(廃校等)とのつながり(開放・活用)(体験も促進)
- ・⑥市内・市外への発信：情報が伝わっていない問題、市外への「東大阪はよいところ」というアピール
- ・その他：要介護者には一人ひとりにケアマネがいてプラン作成するが、子育て分野にもそういったアドバイスをしてくれる人がいてもいいのではないか。
- ・次回に向けて：現状で子どもにとって足りている部分、足りていない部分を精査し、解決のための大小のしくみを考えていく。

4. 事務連絡

5. 閉会

<省略>